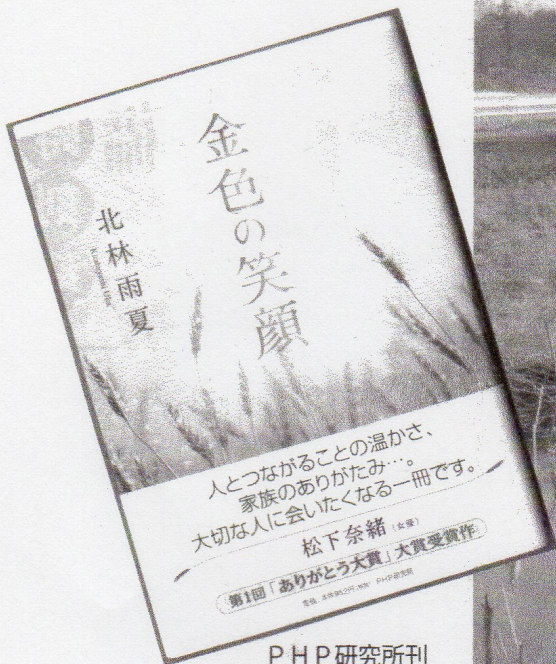


人・グループ 自分が育った茨城県坂東市を舞台に

第1回「ありがとう大賞」大賞受賞作

「金色の笑顔」を書いた北林<sup>きた</sup>雨夏<sup>ばやし うか</sup>さん



小説の舞台となったアトリエ近くの江川のほとりで

第1回「ありがとう大賞」の大賞を受賞した「金色の笑顔」の著者・北林雨夏さんを、坂東市のアトリエに訪ねた。

北林さんは東京都出身で、3歳から高校生までを父の郷里である坂東市で過ごした。これまで東京に仕事場を持ち、2003年朝日放送の「女と男と物語」で脚本家デビュー以来、「浅草ふくまる旅館」や西村京太郎サスペンスなど数々のテレビドラマの脚本を手がけたほか、ドキュメント番組の構成・脚本や映画製作、漫画の原作などにかかわってきた。

今回の受賞作「金色の笑顔」は、そんな数々の経験の中から「終末医療」をテーマに選び、小説の舞台も自ら少女時代を過ごした坂東市を登場させている。審査員からも「舞台となる茨城の自然の情景描写の美しさは特筆に価する」と評価が高い。さっそく小説の冒頭にあるアトリエ近くの江川にご一緒した。「あつ、小舟がある！」と北林さん。見るとその隣には「蒼平じいちゃん」が仕掛けたと同じ「ざっこ」と呼ぶ川魚を捕るためのものも発見。そこで撮影したのが上の写真だ。

北林さんはこれをきっかけに、地元の良いさを多くの人に知ってもらい、この地から文化を発信する活動にも積極的に関わっていききたいと意欲を燃やしている。

彼女の次回作と共に、これからの地元での活躍も楽しみだ。